

はじめに

橋爪大三郎

日本人がひどく苦手なのが、イスラーム教である。

「苦手である」と意識すらできないほど、苦手である。

なぜ、そうなるのか。

まず、日本には、イスラーム教徒がほとんどいない。なるほど最近では、イスラーム諸国からの留学生や渡航者が増え、それなりに目につくようにはなった。が、日本人の意識のなかに、「イスラーム」の場所があるかどうかと言えば、微妙である。日常考えることもない、という日本人が大部分ではないだろうか。

歴史的にも、日本は、イスラーム文明に接触するチャンスがなかった。世界中を見渡しても、珍しいケースである。グローバル化の時代にこれは、致命傷になるかもしれない。「イスラーム初心者」だと自覚したら、すぐにいちから勉強したほうがいい。

*

イスラームは、いまからおよそ一四〇〇年前、アラビア半島で生まれた。たちまちのうちに版図を拡大し、エジプト、シリア、メソポタミア一帯を征圧した。民族や言語、文化をまたいだ、人類サイズの宗教文明を形成した。イベリア半島、バルカン半島、中央アジア、インド方面にも進出した。クルアーン^{*1}（コーラン）を法源とするイスラーム法学を発展させ、その文明は繁栄をきわめた。イスラーム世界はいまもまだ、往時の残照のなかにある。

ヨーロッパ世界は当然、イスラームの存在を意識せざるを得なかった。相手は同根の一神教である。しかも、優勢である。キリスト教を防衛する、護教の意識が先鋭になった。近代になると、武力にものを言わせ、イスラーム世界を次々植民地にした。その後、旧植民地から多くの移民を受け入れて、今日に至っている。日常の接触のなかから生まれた知識（偏見）が、育っている。

インド文明は、地理的な近さから、幾度となくイスラーム勢力の侵入を経験した。この地域には、数億人のムスリムがいる。にもかかわらず、多神教のヒンドゥーと一神教のイスラームとは溶け合わず、互いに反目しつつ、呉越同舟している。インドに暮らす人びとは、イスラームを一日たりと意識しないで暮らすことはできない。

中国文明は、中央アジアを経由して、ユーラシア大陸のあらゆる文化や文明と触れてきた。

清朝は中央アジアを支配下に収め、今日の新疆ウイグル自治区にあたる地域を支配した。住民の多くはムスリムである。北京など大都市をはじめ、中国の全土に、ムスリムのコミュニティがある。「清真餐厅」の看板は、イスラーム純正食品（ハラール）を提供するムスリム食堂のこと。イスラームは中国の一部として、人びとのなかに根づいている。

島国の日本は、つい最近までイスラームと接触しなかった、珍しいナイーブな民族である。だから本書のような、イスラームについて肌感覚で理解できる、一般向けの書物が不可欠なのである。

目次

第一章 戦争観の違い イスラーム VS キリスト教

「すべての宗教はイスラームに帰する」

キリスト教での「啓示」と「理性」

イスラーム法が根幹で、「理性」は補完

テロは政治目標を達成する手段

主権国家と戦争

ジハードと内戦

イスラームはなぜ戦争に弱い？

主権国家はテロなのか

第二章 ナシヨナリズムと戦争

ネーションはいつできたのか

イスラームはネーションを形成しにくい

神の支配と神の王国

イスラーム法が国民よりも優位

教会が実在すれば、法人も実在する

法人にも霊が働く

国民国家と代表の概念

代表には服従する義務がある

ナシヨナリズムと戦争

第三章 キリスト教徒はなぜ戦争がうまいのか

国王が暴力を独占する

火薬革命が封建領主を一掃した

戦争、戦争、また戦争

死屍累々、二〇世紀は総力戦の時代

分離主義で絶対平和を守るアーミッシュ

国家には交戦権がある

徴兵制はどれだけ公平か

第四章 ヨーロッパのシステムは普遍的なのか

普遍主義を名乗るナシヨナリズム

主権を代行するのが「植民地」

イスラームは血縁を増幅する

ダール・イスラームはグローバリズム？

法学者 vs 哲学者

世俗主義 vs イスラーム主義

キリスト教世界はなぜ他文明に猜疑心を抱くのか

グローバリズムが盛り返すために

第五章 核の脅威と国際社会

主権国家をはみ出す核兵器

核兵器へ向かうイスラーム諸国

核兵器を使ってもよいという論理

北朝鮮の危惧されるシナリオ

第六章 イスラームは国際社会と、どのように調和するのか

二一世紀、帝国は復興する

中央アジアとネーション形成の失敗

歴史の経験をたどり直す

右足を西欧文明に、左足をイスラーム文明に

共存のカギを握るトルコ

キリスト教の側からまず歩み寄るべき

利子と法人を否定して、経済発展できるのか

偏見の色眼鏡を取り去るには

第七章 破滅的な核戦争を防ぐ智慧を持てるか

ネーション・ステートは最大の暴力装置

戦争は、神のわざか、人のわざか

戦争の勝敗と正しさは無関係

戦争の実態は「勝ったほうが正義」

社会契約に近かったマディーナ憲章

第二次世界大戦の戦後が終わりつつある

核が用いられる危険は、高まりつつある

おわりに

中田 考